

食嗜好に対する 30 年間の経年的検討

田口田鶴子* ○岡本洋子** 小野謙二*

(*倉敷市立短大, **鈴峯女短大)

【目的】本報告では、1968年当時20歳であった女子99名を対象に30年間の年齢経過を追って食嗜好ならびに味覚感受性の推移を検討した。

【方法】同一対象群99名について、1968年(年齢20歳)、1978年(30歳)、1983年(35歳)、1988年(40歳)、1993年(45歳)、1998年(50歳)の計6回、甘・酸・塩味を特徴とする食べ物に対する嗜好調査を行った(回収率:70.7%(1978年)、96.7%(1983年)、80.8%(1988年)、29.3%(1993年)、58.6%(1998年))。1968年、1993年の2回、上記被検者のうち88名、26名について、甘、酸、塩味物質の等差濃度水溶液を検査試薬として、全口腔・上昇系列法により味覚閾値検査を行った。また比較対照として1988年、1993年および1998年に20歳の女子を被検者として嗜好調査ならびに味覚検査を実施した。Duncan's Multiple Range Test および数量化3類によってデータの検定・解析を行った。

【結果】(1)同一対象群における経年的調査では、20歳、30歳、40歳、45歳、50歳の食嗜好傾向は、(若年層パターン)と(中年層パターン)に分類された。

(2)年齢経過とともに、ぜんざい、酢の物、らっきょう漬、たくあんなどの嗜好度は上昇傾向、キャラメル、夏みかん、サイダーなどの嗜好度では低下傾向がみられた。

(3)同年齢(20歳)を対象とした調査では、1988年、1993年、1998年の食嗜好傾向はいずれも類似していた。

(4)1968年当時20歳であった被検者の甘・酸味閾値(平均値)と25年後の45歳の閾値の間には、統計的有意差はみられなかった。